朝日新聞
昭和49年（1974年）7月29日　月曜日　13版　社会（18）

無事ゴールイン。出迎えの人たちに元気に手を振る青木洋さんン（28日午後3時10分、堺市の石津港で）

さわやか第一声

——「信天翁二世」の青木さん

また海に出たい

「あがこって、すばらしい航海でした」——二十八日午後、手製ヨットで世界一周を果たし、三年ぶりに堺市の石津港に帰ってきた「信天翁二世」。青木洋さんの第一声は、この日の空のようにさわやかだった。航海中の苦労と感激。それを乗り越えてきた青木さんが、最愛のヨット仲間や肉親から「よくやった」の称讃の声に感きわまったのか、メガネをはずして涙を何度もぬぐっていた。

午後1時半ごろ。エンジンのサウンドの一番乗りに続いて、ヨットの一団が近づくと、資堺を走った。年子さんが「ごくろうさーん」と手を振る。硬い表情でかじを握っていた洋さんが、にこっと笑い、手を振り返した。「やっぱりおぼえていた。三年前、ここで見送ったことを」。青木さんの目はうるんでいた。

「信天翁二世」を最初に見つけたのはロイヤル石津ヨットクラブの「瀬海」＝航海練長＝ら五人乗り組み。無線機を積まず、どこを航海しているのかわからない「信天翁二世」の姿を求めて二十七日にも紀伊水道付近まで出迎えに行き、むなしく引き返してきただけに、二十八日午前八時半ごろ、泉佐野市の食品コンビナート沖合で、乗員の一人が帆走中のヨットを指さして「信天翁とよう似とるな」といったとき、だれも信じなかった。

長い航海で出港時と色も違い、キャビンの形も変わっている。望遠鏡をのぞいても船体の船名が小さくて読めない。その直後、「あれ、クラブの旗やないか」。白地に「R」・マストにはためいているクラブ旗を唯一の手がかりに「発見」の無線連絡が飛んだ。

上陸した青木さんはすぐ車で着いたばかりの妻へ。「ツルさん、あんたにいちばん迎えてほしかった」と、長い間頭を離れ、びんにつめた、ヨットマンあこがれのホーンの海水をかけた。

「冒険こそ進歩の力」記者会見

青木さんは帰港後すぐ、石津港の一室で記者会見してこんどの航海の感想や、これからの宇宙旅行などについて語った。

——三年ぶりに無事入港されてどう、現在の感想は。

うれしい。しかし、できることなら、また航海に出たい。

——ホーン岬通過の感想は。

ものすごく感動した。人間の無智の行為とはこのことだ。ここにたくさんの人が葬られ、死んでいった。そこには人間をかりたてる何かがある。それが冒険心とはなかろうか。

——この航海の最終目標はどうであったか。

たことが一番うれしかった。

——航海で得たものは。

負けようとする自分との闘いがしんどかった。悪らしくて何度もやめようという気持ちがあったが、それに打ち勝ったこと。自力をつくすまでは、ひかれへんという気持ちだった。

——これからすることは。

きょうはヨットの掃除をしたい。それから再び航海に出たいが、どこに行くかはまだ決めていない。

冒険が好きな人は日本にもたくさんいる。でもそれぞれ事情があってできない人も多い。この点、ぼくはめぐまれていたし、冒険でない人の分もがんばってきた。

——冒険とは。

冒険こそ人類の進歩の原動力ではないでしょうか。

——世界各地に寄港したときの歓迎ぶりは。

親切心の押し売りではなく、素朴な、本当に心からの親切を受けるう気持ちだった。